

周辺からコアへ: 若者ことば・方言から言語をながめる

著者	桑本 裕二
雑誌名	東北大学言語学論集
号	26
ページ	9-23
発行年	2017-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130470

周辺からコアへ：若者ことば・方言から言語をながめる*

桑本裕二

キーワード：若者ことば・方言・通時変化・共時的多様性・標準的言語

1. はじめに

Saussure (1916) の提唱に始まる、言語現象を通時態 (diachronie) と共時態 (synchronie) の2つの次元においてとらえる手法は、その後の言語学に対して基本的な概念として取り入れられてきた。本稿は、ある一時点（特に現在）での共時態を様々な語種で観察した場合、当然、中心的なものと同辺的なものに二分される分布を示すが、何をもって「中心的」とするのか「同辺的な」とするのかということに焦点を当て、特に若者ことばと地域方言の共時態でのふるまいを考察したものである。

本稿では、中心的なものを仮に「コア」と呼ぶことにするが、そもそも「コア」であるとはどういうことかということが問題になるだろう。さらにそれをうけて「同辺的な領域」が浮かび上がるが、「同辺的なである」とは「正道」に対する「邪道」であったり、「標準」に対する「非標準」であったりし、社会言語学的には、心理的印象は決してよいものとはみなされない。その代表として、若者ことばと地域方言を取り上げるならば、特に前者は邪道な語彙群とみなされ、まともな研究対象にあげられることすら少ない。後者（地域方言）は、研究対象としてや、その心理的地位は、標準語（日本語の場合東京方言）と同等か、むしろ研究成果の価値は上回っているとすら考えられる部分は多い。しかしながら、地域方言は、常に標準語の影響にさらされ、特有の言語現象が衰退しつつあるという状態にあり、極めて脆弱な言語実態であるといわざるをえない。本稿は、日本語の若者ことば、地域方言を観察し、これらの同辺的なであることとみなされる言語に対して、「コア」なものとは何であるのか、また、何をもって「コア」であるといえるのかということ考察するものである。

論考は、若者ことば（桑本 2003, 2010, 2013, 2014, 2016a,b）と鳥取県倉吉方言（桑本 2017）についての筆者自身の先行研究に基づいている。また、当然のこととして、論点は通時態にも及び、そちらからの考察も加わっている。

2. 同辺的な言語群とそれに対する「コアなもの」

2.0.

本稿で主にあつかう、若者ことばと地域方言の他にも、例えば、話し言葉としての口語、また、禁忌語 (taboo) など、同辺的な言語群とみなされる。本節では、それらのそれぞれの同辺性と、それに対する「コアなもの」について考える。

2.1. 「若者ことば」に対するもの

若者ことばは、その担い手である若者世代を主な使用者とし、「若者文化」としてまとめることのできる特有のサブカルチャーの中で運用される、一種の集団語（米川 2000b, 2009）と定義される（桑本 2014:68）。若者ことばを同辺的な言語とみなした場合、それに対する「コアな言語」とは何であるのか。短絡的な判断でいうならば、「ちゃんとした言い方」と

いう回答がまずえられるかもしれない。それでは、「ちゃんとしている」とはどういうことであるのか。「丁寧な言い方」なのか、または、「フォーマルな言い方」なのか。また、「大人の言い方」というものが対極にあるようにも感じられる。そのときの「大人」とはどのような集団を表すのだろうか。それに対する「若者ことば」を発する「若者」とは誰を指すのか、ということになるかもしれない。

桑本 (2013, 2016a:43) は若者ことばを使用する「若者集団」の年齢層を「10 代後半から 40 歳くらい」と定義づけた。しかし、ある言語コミュニティにおける上記の年齢層のすべての人が若者ことばを使用するわけでもなく、また、若者ことばを日常的に使用するある個人がいた場合、その一個人がつねに若者ことばのみを使用して生活しているわけでもない。さらに、上記の「10 代後半から 40 歳くらい」という定義は、桑本 (2003:114) では「10 代後半から 20 代前半」と定義し、筆者自身の考察ですら、10 年程度の間はそのとらえ方が変化してきている。したがって、若者ことば自体の使用者集団や使用域の境界すらはっきりさせられないので、ましてやその対極にある「コアなもの」を明確に定め、その特徴について言及するのはさらに困難なことである。

2.2. 「(地域) 方言」に対するもの

地域方言を周辺のものと位置づけた場合、コアなものはいわゆる標準語である。しかしながら、標準語という言い方自体、一般的にはかなり曖昧なものであって、アクセント、音韻論が関わる場合、多くは「東京方言」と言及し、その場合は、東京地域住民の話す言語、という意味で用いられる。また、「共通語」という用語を用いる場合は、異方言話者同士が意志を疎通させるための共通言語としての意味があり、表面的にはいわゆる標準語がその役割を担っているが、厳密にいうと、ある地域方言話者が、語彙や文末表現などのいくつかの特徴を消し去りながら、なおその他のいくつかは残しつつ、他地域方言話者と最大公約数的な言語使用をした場合、それはいわゆる標準語とは異なる言語実態を示すものとなる。このように考えてくると、「地域方言」に対するコアなものとは一体何であるのかは極めて曖昧である。

標準語に関していえば、国家レベルで制定されるという体裁をとるのが普通で、現代日本語の標準語は、明治の国定国語教科書が 1903 年 (明治 36 年) に出されて確立したものとされるとされる。当初は、国民がおしなべて同じ言語使用をすることで国家の統一をはかることを目指したもので、特に軍隊の統率のための共通言語を目論んだものであると推察される。

アクセントや音韻に関しては、日本放送協会 (NHK) のアナウンサーが研修を受けて¹⁾使用するもので、NHK 放送文化研究所 (2016)²⁾にしたがうものである。NHK のアナウンサーは必ずしも東京地区の出身者ではなく、テレビやラジオで発話 (アナウンス) する場合は、母方言に基づくものではなく、研修を受けて身につけた語彙、アクセントにしたがっていることになり、その意味においては NHK アナウンサーの発話は日常言語ではなく、直感的に文を生成したり、正誤を判断できるものではない。

2.3. 「口語」に対するもの

「口語」とは、通常「文語」に対するものであるが、その場合の「文語」とは古語を意味することが多く、それにしたがえば、「口語」は現代語である。「口語」には話しことばという意味で用いられる場合があるが、さらにいえば、仲間内、身内など親近感を感じる同士

での話しことばととらえることができる。その場合は、対極にあるのは「フォーマルな話しことば」「丁寧な言い方」である。しかし、「丁寧な言い方」をコアとした場合、周地的であるのは「ぞんざいな言い方」であるが、はたしてここでいう「口語」がぞんざいな言い方なのか、という疑問は残る。

2.4. 「禁忌語 (taboo)」に対するもの

小林 (2011) によると、禁忌語とは「差別語」「不快語」と称されるもので、一般的には公言するのがふさわしくないとされる語彙、言語表現である。放送業界では「放送禁止用語³⁾」として一般的にも知られているが、その語彙、言語表現によって、ある種の社会的弱者に対する差別を助長したり、猥褻、卑猥な表現により話者の品性を疑いかねないといったものである。これに対する対極的なものは、婉曲語 (表現) (euphemism⁴⁾) である。2,3 の例を挙げると、以下のようなものがある。

- | | |
|---------|---------|
| (1) 認知症 | < ぼけ、痴呆 |
| お手洗い | < 便所 |
| あそこ | < 陰部 |

ここで問題となるのは、直接的な表現である禁忌語は、はたして周地的な言語使用であるのかということである。通常の発話に積極的に用いられるか否かという側面では、禁忌語は周地的であろうが、意味を直接的に明示しているか否かという側面においては、十分にコアでありうる。禁忌語については、どのようにとらえるべきかは非常に困難であるといえる。

3. 音韻的な現象

3.1. 通常語彙の母音融合

例えば、「痛い (itai)」が口語的に「いてー (ite:)」のように /ai/ が /e:/ に音韻交替する場合には、次の図が示すように、調音点が平均化して全体のモーラ数を合わせるような長音化が起こっている。

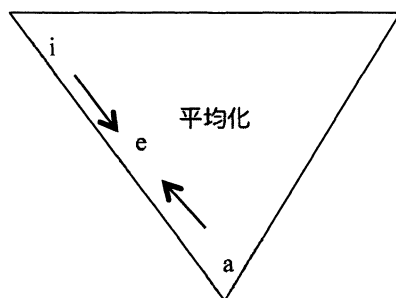


図1 /ai/ → /e:/ の平均化

また、室町末期から江戸時代にかけての音韻変化の例として、「まうす (申す) (mausu)」が mo:u に変化する (森田 1977:274) が、この際の /au/ → /o:/ についても、調音点の平均

化が結果として考えられる。

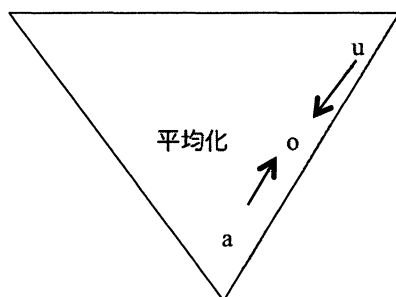


図2 /au/ → /o:/ の平均化

3.2. 若者ことばにおける母音融合

前節の調音点の平均化に対し、若者ことばにおける「すごい」から「すげー」が派生される場合は、その過程は異なる。/oi/ → /e:/ の音韻過程には平均化は起こっていない。図示すると次のようになる。

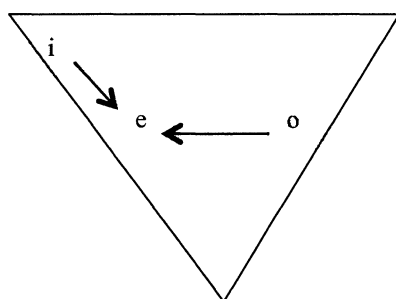


図3 /oi/ → /e:/

窪菌 (1999:101) は、この現象について、2つの母音連合に対し、前部要素（この場合は /oi/ の /o/）の高舌性（highness）と、後部要素 /i/ の後舌性（backness）が融合した結果、/e:/ が生成されるとしている。

(2) 窪菌 (1999) による、「すごい」 → 「すげー」 (/oi/ → /e:/) の説明

o	-	i	→	e:
[-high]		[+high]		[-high]
[+back]		[-back]		[-back]

なお、若者ことばとしての音韻融合として、次のようなものが観察される。

(3) ちげーよ (ʧige:jo) < ちがうよ (ʧigaujo)

(3) からは、/au/ → /e:/ という派生が考えられることになる。前節の「まうす」からの /au/ → /o:/ の通時変化を踏襲するならば「*ちごーよ (ʧigo:jo)」という形が予想されるが、実際

にはこのような形は存在しない。この音韻交替に関しては、「違い」という動詞連用形語幹から「ちげー」が派生した可能性があり、その推測にしたがえば「いたい」から「いてー」が派生したのと同じ調音点の平均化が起こっていたものと考えられる (4)。

(4) ちがい (ʃigai) → ちげー (ʃige:)

ここにみられる「ちげーよ」の派生は、文法的な誤解、混交が関わっていることが考えられるが、後述の「ちがくて」を想起させる、同様の派生のように見受けられる。

3.3. 山陰方言に見られる特徴的な連声

鳥取県倉吉方言において、標準語の「買う」→「買ってくる」という、いわゆる促音便が起こる環境で「かーてくる」のようにア段長音で表れる現象がある。これは、兵庫県但馬地方から鳥取県全域、島根県出雲地方、隠岐地方の一帯で広くみられる現象である (森田 1977: 276)。これは、室町末期に存在したというオ段長音の開合の区別に由来するものであるとされる (真田 2002、森田 1977 など)。

開合の区別とは、かつての母音連合 au (図 4 ①) と、ou, ouo, eu, iu (図 4 ②) が、室町時代末期には同じくオ段長音でありながら、前者と後者の音質の区別があったとされる。それぞれ「開音」「合音」と呼ぶが、『日本大文典』(1604-1608, ロドリゲス)によれば、開音は む と表記され、「拡がる む」との記述があり、IPA では [ɔ:]、一方合音は む と表記され「窄 (すば) る む」であり、IPA では [o:] であると推定される (森田 1977: 274)。この開合音の区別は江戸初期には失われ、[ɔ:] に融合して標準語等ではそのまま現在に至る。真田 (2002) は、山陰方言のア段長音の存在については開音に由来するとし、当該方言では、歴史的仮名遣いで「あう」と書かれるものは a: であり、「おう」と書かれるものは o: であるというように、未だ、部分的にはあるが、開合の区別を保存しているとしている。桑本 (2017) は、この山陰方言のア段長音を、開合の区別が生じる前の au から派生と考えた。つまり、au から a: の派生は、au の後部要素の脱落と代償延長で容易に説明がつくからである。江戸初期以降に融合した o: から部分的に派生した考えるには無理があり、また、室町末期の開合音 ɔ:/o: の対立から ɔ: だけが a: になったというのも、説明するにはやや困難である。図示すると以下のようになる。

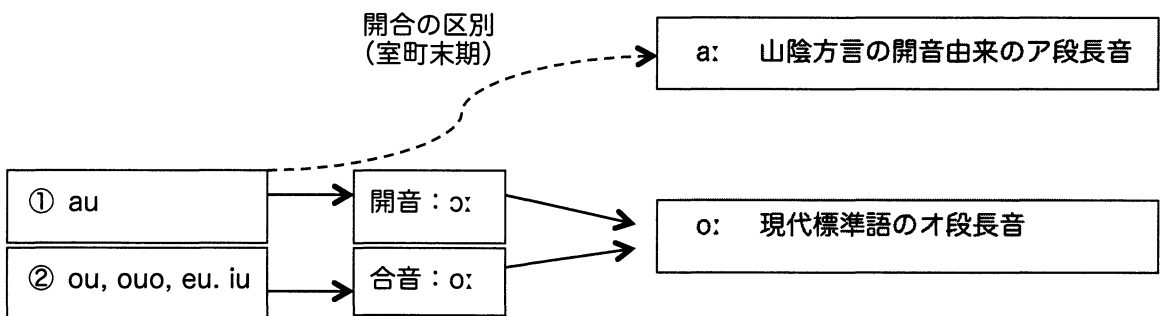


図 4 開合音の融合と山陰方言のア段長音の派生

4. 文法に関わること

4.0.

本節では、文法に関わる事例として、「ら抜きことば」と「ちがくて」の生成と問題点について考察する。両者とも若者ことば、地域方言の双方に関わる問題であり、それぞれ機能上特有の特徴が見られる。さらに、鳥取県方言での「ちがくて」に類似した新しい語形「せんくて」について分析する。

4.1. 若者ことばとしての「ら抜きことば」

すくなくとも標準語圏においては、いわゆる「ら抜きことば」は非文法的であって、若者ことば特有の言い回しである。

若者ことば、もしくは昨今の誤用の例として、上一段活用、下一段活用、カ行変格活用の動詞の可能形に、以下のような語形が見られる。

(5) 動詞の可能形（ら抜き表現）

上一段活用：着れる、見れる、信じれる...

下一段活用：寝れる、食べれる、考えれる...

カ行変格活用：来れる

伝統的な文法にしたがえば、上一段、下一段、カ変動詞の可能形は、活用語幹に助動詞「られる」が後続するのであって、「れる」が後続するのはその他の活用形（五段活用、サ行変格活用）の場合である。(5) の活用形は正しくは、「着られる」「見られる」「信じられる」「寝られる」「食べられる」「考えられる」「来られる」であり、「ら」が抜けているために「ら抜きことば」といわれている。そして、必要な要素が欠如しているように見えるので、「墮落した形である」と批判の対象になる。

ところで、助動詞「れる」「られる」は、共通して以下の4つの意味がある。

- (6) a. 可能
- b. 受動
- c. 尊敬
- d. 自発

この分類のなかで、(5) のような「ら抜き」が存在するのは (6a) のみである。例えば、つぎのような文は若者ことばとしてですら成り立たない。

- (7) a. *カエルがヘビに食べれる。(受動)
- b. *先生が来れたので、あいさつした。(尊敬)

井上 (1998:12) は、「ら抜きことば」については、(6a) と (6b-d) を語形によって区別している意義がある、と積極的にとらえている。たとえば、若者ことばとしては、「食べる」に対して可能形「食べれる」と受動形「食べられる」は語形での区別があるのに対し (8)、標準的な文脈では両者の語形は区別されない (9)。

(8) 若者ことばの文脈：

おなかいっぱいでも食べれない。(可能)

カエルがヘビに食べられる。(受動)

(9) 標準的な文脈：

おなかいっぱいでも食べられない。(可能)

カエルがヘビに食べられる。(受動)

上記の「ら抜き」のように、可能形と受動形を語形で区別する変化は、実は五段活用でも起こっている。(10) が示すように、「行く」「読む」「走る」に「れる」が後続して可能の意味になるのは現在ではやや古く感じられる。

(10) a. ?この道を通れば 5 分で駅に行かれる。

b. ?この本は簡単なので子供にだって読まれる。

c. ?このウエアを着れば、雨の中でも快適に走られる。

これらに対し、「行ける」「読める」「走れる」という語形で可能を表すことができる（可能動詞）。

(11) a. この道を通れば 5 分で駅に行ける。

b. この本は簡単なので子供にだって読める。

c. このウエアを着れば、雨の中でも快適に走れる。

(11) で使われている語形からは、共通の助動詞を抽出できないが、(12) のように考えると、いわば「-ar- 抜き」表現といえる。

(12) 「行かれる」→「行ける」

ikareru → ik(ar)eru → ikeru

このとき、五段活用の可能形と受動形などは語形で区別されていることになる。

(13) a. 子供にも読める容易な文章。(可能)

b. 村上春樹の小説は、幅広い年齢層で読まれている。(受動)

つまり、若者ことばとしての「ら抜き」表現の出現を、可能形とそれ以外（特に受動形）と語形で区別する機能ととらえるならば、標準語形ですでに起こってきた (12) のような語形変化を踏襲したのものであると考えられる。その結果、この「ら抜き」表現に注目した場合には、若者ことばを周辺の語彙群とは必ずしもいえないことになる。「墮落」と言われている現象も、見方を変えれば十分にコアな現象を投射していることになる。

4.2. 地域方言のなかの「ら抜きことば」

鳥取県倉吉方言（幅広く山陰方言）では、前節で扱った若者ことばとしての「ら抜きことば」は文法的な現象として存在する。(14) の例は一般的に聞かれる言い回しに出現する。

- (14) それ、食べれっだかいや。 (それ、食べられるのか?)

当該方言で、可能以外の受動、尊敬、自発の表現に「ら抜き」が現れない点は、若者ことばと同じく、語形で意味を区別しているといえる。ただし、若者ことばとは異なり、最近の語形変化とは認められないことから、当該方言における「ら抜き」は標準語の影響とは関係のない独自の文法がもともとあったと考えられる。

また、倉吉方言⁶⁾では、五段活用の可能表現に対して、「れる」形と可能動詞が共存して、微細な意味の区別をしている。否定形に限られるが、「行かれる」からの「行かれん」は禁止を表し (15a)、可能動詞「行ける」からの「行けん」は不可能を表す (15b)。

- (15) a. そっちに行かれん。 (そっちに行ってはならない。) (禁止)
 b. 用事があつて、行けん。 (用事があるので行くことができない。) (不可能)

これは、標準語形にも、若者ことばにもない、当該方言独自の多様化であると認めることができる。

4.3. 「ちがくて」

「ちがくて」という言い回しは、正しくは「ちがって」の誤用である。

「ちがう」という動詞の連用形に「て」が後続して「ちがって」が形成されると、

- (16) A は B とちがってうっかり者だから、用事を忘れてくるかもしれない。

のように「ちがう」という一種の動作を表している。

一方、「ちがう」には、会話のなかで、「ちがう！」という、先行する会話の内容を否定したり、相手の言ったことに対して、「そうではないのであつて」という、状態に対して反応する場合にも用いられ、「ちがう！」に何か後続させる場合は、「ちがって、」では意味が伝わりにくい⁷⁾。状態を表すのであるから、形容詞であるように誤解され、形容詞の連用形に連なる「くて」を続けるのがふさわしいように感じられる。ところで、動詞「ちがう」の連用形は「ちがい(ます)」であり、連用形の語尾の後続しない形が「-い」で終わるので、これを形容詞のように異分析し、「高い」→「高くて」、「重い」→「重くて」の類推で、擬似的な形容詞「ちがい」から「ちがくて」が派生したものと推察される。(17) のように用いられる。

- (17) A: これから海水浴に行くんだろ?

B: ちがくて、それは明日。

「ちがかった」というのも、「ちがっていた」の意味で使われることがあるが、これも疑似

形容詞「ちがひ」からの派生であると考えられる。

4.4. 方言での新しい語形「せんくて」

鳥取県方言で、「しなくて」の意味で「せんくて」という言い方が、若年層を中心に使われ始めている。当該方言では、「せんで」あるいは「せーで」というのが正しい語形である。

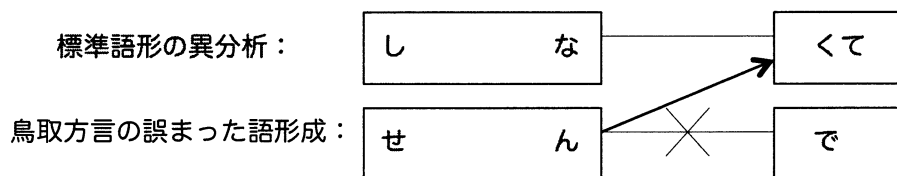
当該方言では、否定語「ない」は「ん」となり、標準語で「する」に「ない」が後続する「しない」は、「せん」になる。これは、標準語で「する」の未然形「し」に否定の「ない」が後続するのに対し、鳥取方言では「する」の未然形は「せ」であり、それに否定の「ん」（古語の「ず」に由来）が後続しているので、構造上は同じである。

標準語の「する」の未然形は「し」の他に「せ」もあるが、「せぬ」のような古風な言い方の時のみ使われ、通常は用いられない⁸⁾。

次に、標準語「なくて」は「ない」の連用形「なく」に活用語尾「て」が後続して形成される。鳥取方言も同様に、「ん」の連用形「ん」に「て」が後続するが、鼻音の後で有声化し、「で」となり、「んで」となる。標準語と鳥取方言の「しなくて」「せんで」は次のように派生している。

- (18) 標準語： しーなく て
鳥取方言： せーん て（→で（有声化））

鳥取方言における誤用の「せんくて」は、まず、標準語の「しなくて」が、(18) のような「し-なく-て」ではなく「し-な-くて（または、しな-くて）」と異分析され、「くて」という擬似的な活用語尾が派生した。それがそのまま鳥取方言の形に援用された結果である（図5）。



方言形に、それまでなかった新しい変化として、標準語形との混交によって成立したという点で、井上史雄氏の定義による「新方言」の一種であるといえるが、さらに、異分析も加わっており、非常に複雑な語形成となっている例である。

なお、鳥取県方言での「せん」の「せ」を、標準語形の「する」の未然形「し」に替えただけの「しん」のような新方言は存在しない。

5. 語彙の変化・変異

5.0.

本節では、通時態に着目し、語彙の変化が、若者ことばと地域方言でどのように起こっているのかを述べ、それがコアな言語実態とどのように関わっているのかを論ずる。

5.1. 「マジ」の底力

若者ことばは概して短命であり、米川 (2009) は大半の語は 3 年以内に消失すると分析し、長瀬 (1999) は、若者ことばの寿命を 2～5 年と断定している (桑本 2014:70)。その中であって、最も良質に進化した若者ことばは「マジ」である (桑本 2010:120)。

桑本 (2010:119ff) は、「マジ」の定着した理由について 4 つの項目を挙げている。

- (19) a. 使用頻度の多さ
- b. 意味の多様性
- c. 派生語の多さ
- d. ノリの悪さ

「使用頻度の多さ」について、桑本 (2016b) は、1990 年代、2000 年代、2010 年代から 3 つのテレビ連続ドラマを選び⁹⁾、若者ことばと認められる語 31 語について出現頻度を調査した。そのなかで、顕著に出現回数が増加したものをあげると、以下の表のとおりとなる。

表 若者ことばの出現回数 (回)

	あすなろ白書 ¹⁰⁾ (1993 年)	天体観測 ¹⁰⁾ (2002 年)	SUMMER NUDE ¹⁰⁾ (2013 年)
マジ	3	8	48
やっぱ	7	10	31
～じゃん	20	40	119

このうち、「マジ」については、「あすなろ白書」では散発的に 3 回発せられたに過ぎないのに対し (20)、20 年後の「SUMMER NUDE」では、おうむ返しのように応答に繰り返されたり (21a)、ひとつの台詞のなかに何度も繰り返されたりする (21b) ことで出現回数が増えたと考えられる。

(20) 「あすなろ白書」の「マジ」の例 (桑本 2016b:239) :

—マジ? 超リッチー。今日の合コンってさ、結構レベル高いと思わない?

(21) 「SUMMER NUDE」の「マジ」の例 (ibid.):

a. —いつ?

—昨日。

—今、マジな話してんだけど。

—マジで昨日来たんだって。

b. —マジっていうかさー、結局マジにもならせてくれなかったって
いうかさー。

意味の多様性については、桑本 (2010) はおよそ次の 3 つの意味があると説明している。

a. 本当に 例：俺、昨日マジでUFO見た。

b. 本気で 例：おまえ、マジで勉強しないとやばいって。

c. 真に受ける 例：おいおい、マジになるなよな、冗談だつーの。

さらに、派生語が多いことも定着を促す。「マジ」については、「マジギレ」「マジうざ」など複合語が多く派生すること、また、「マジむかつく！」のような副詞としてのふるまい、さらに、「マジ？」—「マジ。」のような1語のみによる応答への使用など、使用域が幅広い。このことも定着を助長していると考えられる。

5.2. 同一語の意味の変化—「やばい」の場合—

「やばい」という若者ことばは、「危うい」から転じたという説が有力である。当初は「身が危険である」「状況が危険である」といった意味で用いられていた。2000年代なかば頃(2005年頃)から「大変よい」「うれしい」「好きだ」の意味でも使われはじめ、2010年代半ばを過ぎた現在(2017年)では、若者ことばとしてはむしろ後者が主流である。

「やばい」の意味の変化はおよそ (24) のようになる。

(24) 「危険である」 → 自分の気持ちが抑えきれないほど「危険である」
→ 「すごくいい」「好きだ」 桑本 (2010:45) より引用

これは、「凄い」などと同じく、意味の上昇を示す例である。

若者ことばには、前節の「やばい」のように同一語彙の意味の上昇をみせるもののほかに、同一意義、同一概念を表すことばが次々に入れ替わることがある。これは、特に、相手をけなす表現、程度の激しさの表現などが多く、斬新さを求めて急速に他の語形に入れ替わる¹⁵⁾のが普通である。本節では例として、「他者が理解できないほどある趣味に没頭し、詳しい知識を有する人、状態」を表す語彙として、「ファン」から「オタク」に至る語彙の変遷を観察する。桑本 (2010:134) の、「ファン」から「オタク」およびその後の語彙の変遷

を図 6 に示す。

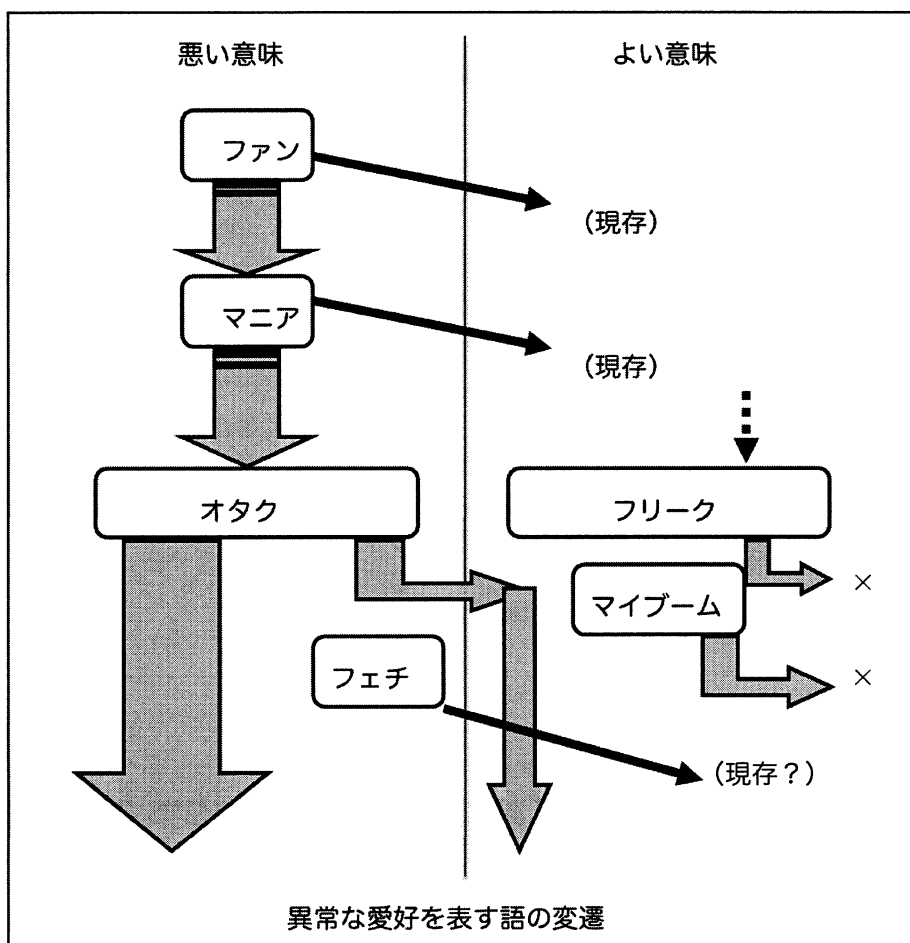


図 6 異常な愛好を表す語の変遷（桑本 2010:134 一部変更）

もともと悪い意味で使われていた「ファン」が「マニア」「オタク」に次々に入れ替わり、現在に至る。なお、その都度入れ替わった語彙は意味の上昇をともない、いい意味かまたは心象的には中立的な語彙へと変化する。いい意味での「フリーク」「マイブーム」は単発的に出現して消えていった。悪い意味での「フェチ」はとりあえずいい意味へと移行したが、現在使用頻度はそれほど高くない。なお、標準的に使用される語彙に比べると、変化の速度は非常に速いというのは特徴のひとつである。

5.4. 「バカ」と「アホ」の流入—関西圏と首都圏を例に—

松本 (1993) によると、「愚か」の意味で、「バカ」と言うのは関東から東北地方に集中しており、「アホ」と言うのは関西圏を中心としている。首都圏において、仮に「アホ」と発話すると、「バカ」よりも激しく印象づけられ、逆に関西圏で「アホ」の代わりに「バカ」と言えば、鋭く中傷しているように感じられるようである。

5.3. で考察したように、若者ことばのある語彙（例えば「ファン」）が激しい斬新さを持っていた時期が過ぎて陳腐さが目立ち始めると、より斬新な語形が求められ、「マニア」が出現する。そして、「マニア」の斬新さが失われると「オタク」が出現する、というように次々と新しい語彙に取って代わる。首都圏も含めて、ある地域方言社会に新しい語彙が流入すると、初めは非常に斬新で勢いのある語彙として受け止められる。そのため、「バカ」「アホ」のような中傷の語彙は非常に力強いものとなる。これが、首都圏における「アホ」、関西圏における「バカ」の心理的印象となる。関西圏においては、「バカ」の流入は標準語の流入であり、やがて斬新さを失うと関西方言自体が標準語化へ向かうことになる。首都圏における「アホ」の流入は、地域方言（この場合関西方言）の流入である。これは「めっちゃ」などの語彙と同じく、流行語、若者ことばの地位をもつが、やがては首都圏においては一般的俗語の地位をもつことになる。

6. まとめ

以上、標準語、もしくは標準的な言語使用からすると周辺的であるとされる若者ことばや地域方言、特に鳥取県倉吉方言の様々な特徴を分析し、両者の共通性やそれらに対極的な「コア」な言語実態をさぐるということを通してある共時態、通時態にみられる言語実態の分布を考えた。若者ことば、地域方言ともに、実際には正統的と目される標準語、標準的な言語使用と同等または類似の特徴を多くもち、一方でそれら周辺的な言語にしかみられない特有の現象も多く見られる。

若者ことばは、原則的にコアなもの（一般語彙）の変化を先取りしていたり、変化が比較的早いので、通時変化を確認するための期間は非常に短くてすむという、研究上の利点はある。しかし、反面、語彙の寿命は非常に短く、それぞれを明確に確認し分析するのは非常に困難である。

地域方言は、コアな言語（標準語）に比べると、まだ標準語で起こっていない変化をとまなう新しい語形が見られる一方、古い語形が残っており、それが独自に変化しているのも観察される。また、標準語で非文法的とされる語形が十分に文法的であることは多く存在し、さらに、若者ことばにみられるような誤用（「せんくて」のような語形）も若年層を中心に広まっている。

若者ことば、地域方言は周辺的であって、コアなものを標準的とするならば「非標準的」な言語実態であるということになる。しかし、本論で述べたことにしたがうならば、何をもって「標準的」であり、それゆえ「正統的」「より正しい」ものはどちらであるのかという議論は無意味であろう。一見周辺的である若者ことば、地域方言は、それに対する一般語彙、標準語といったいわゆるコアなものと同等に注目に値する言語実態であるといえる。

注

- * 本稿は、滋賀大学経済学部講演会（2017年6月9日、滋賀大学彦根キャンパス）において行った同名の講演に基づき、まとめ直したものである。滋賀大学経済経営研究所担当部局各位には当日の講演会開催に当たっては非常にお世話になった。特に、当講演会を実質的に主催され、企画、運営に携わった滋賀大学准教授野瀬昌彦氏には格段の配慮をいただいた。特筆し謝意を申し上げる次第である。

- 1) NHK 放送研修センターで行われている。
- 2) 参考文献にあげられている『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（NHK 放送文化研究所、2016）は、前身は『日本語アクセント辞典』（1943 年刊）である。
- 3) 桑本充悦氏（BSS 山陰放送アナウンサー）との私信によると、「放送禁止用語」というものははっきり定義されたものではなく、必ず守るべき法律、社内の内規のようなものは存在しないということであった。ある表現が放送上ふさわしいか否かについては、その放送、報道の性質、その時々で状況で臨機応変に対応させるものだということである。
- 4) 英語では PC (political correctness) と言われる言語表現が存在する。
- 5) 「すぼる」の誤植の可能性あり。真田 (2002:120) に、「開音—ひらく、合音—すぼる」とある。
- 6) 鳥取東部地域でも同様の特徴を持つ。
- 7) 井上 (1998:68ff) も参照のこと。
- 8) これに対し、鳥取方言では「せん」などのように未然形として「せ」の他に「しよう」のように「し」も共存している。
- 9) データベースのソースとして、全 11～12 回（のべ 8 時間 30 分程度）の連続テレビドラマを利用するのがもっとも適当である点については桑本 (2016a) に詳述している。
- 10) 桑本 (2016a:42) は作品の選定基準として、以下の項目をあげている。
 - a. 年代設定が放映時の現代であること。
 - b. 中心的な登場人物が 20 代半ばくらいの若者数名である。
 - c. 主要登場人物は、男女が適当に交じっていること。
 - d. 主要登場人物を演じるキャストの放映時の実年齢も同じく 20 代半ばであること。
 - e. 主人公たちの家庭（親、きょうだいとの会話が想定される状況）は中心的な場面となっていないこと。
 - f. 登場人物たちの感情ののった生き生きとした表現が期待できるので、できればラブコメディである。
 - g. 医療現場や法曹界など高度に専門的な用語が飛び交う状況下のものは避ける。
 - h. SF やホラーなど状況が非現実的な場面設定のものは避ける。
- 11) 『大辞林 第 3 版』（2006 年、三省堂）に「まじ」の項がある。

まじ：②（主に若者言葉で）本当であるさま。また本気であるさま。「—になる」「—な話」〔上昇調で感動的に「まじ（で）？」と使われたり、程度強調の副詞として「まじ、むかつく」のように使われることがある〕
- 12) 「チョー・ベリー・バッド」の略で、「とっても悪い」の意。
- 13) 女性の髪型の場合に、黄色く染めてしばらく手入れをしないと、もともとの黒い毛が根本から生えてきて、黄色い染髪なのに頭の上のところだけが黒いのが。まるでプリンみたいだから、そう名づけられたようである。（桑本 2010:128f）
- 14) 「空気（Kuuki）読めない（Yomenai）」の頭文字語。
- 15) この点においては「若者ことばは短命である」という特徴が如実に反映されている。

参考文献

- 井上史雄 (1998)『日本語ウォッチング』東京：岩波書店.
- 小林健治 (2011)『ウェブ連動式管理職検定 02 差別語・不快語』東京：株式会社にんげん出版.
- 窪菌晴夫 (1999)『日本語の音声 現代言語学入門 2』東京：岩波書店.
- 桑本裕二 (2003)「若者ことばの発声と定着について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第 38 号, 113-120.
- 桑本裕二 (2010)『若者ことば不思議のヒミツ』秋田：秋田魁新報社.
- 桑本裕二 (2013)「若者ことばから現在日本語を考える—語彙分析、通時変化を通じて—」秋田にほんごの会第 144 回学習会講演資料, 2013 年 9 月 7 日, 秋田県民会館ジョイナス.
- 桑本裕二 (2014)「若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第 49 号, 68-75.
- 桑本裕二 (2016a)「若者ことばの通時研究のための連続テレビドラマのデータベース利用の有効性について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第 51 号, 37-44.
- 桑本裕二 (2016b)「若者ことばは通時変化を確認できるか?—テレビドラマのデータベース作成とその分析結果より—」小川芳樹・長野明子・菊地朗編『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』東京：開拓社, 233-248.
- 桑本裕二 (2017)「鳥取県倉吉方言における開音由来の a: とア音便について」PAIK (関西音韻論研究会) 2017 年 1 月例会ハンドアウト, 2017 年 1 月 28 日, 神戸大学.
- 松本修 (1993)『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』東京：太田出版.
- 森田武 (1977)「音韻の変遷 (3)」『岩波講座日本語 5 音韻』東京：岩波書店, 253-280.
- 長瀬治郎 (1999)「語の盛衰—キャンパス言葉の寿命—」『日本語学』第 18 巻第 10 号, 東京：明治書院, 14-24.
- NHK 放送文化研究所 (2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』東京：NHK 出版.
- 真田真治 (2002)『方言の日本地図 ことばの旅』東京：講談社.
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique générale*, Paris: Payot. [小林英夫訳 (1940)『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学講義』東京：岩波書店]
- 米川明彦 (1999)「おもしろい現代語語彙」『日本語学』第 18 巻第 1 号, 東京：明治書院, 41-50.
- 米川明彦 (2000a)「集団語に見ることば遊び」『日本語学』第 19 巻第 1 号, 東京：明治書院, 54-64.
- 米川明彦 (2000b)『集団語辞典』東京：東京堂出版.
- 米川明彦 (2009)『集団語の研究 上巻』東京：東京堂出版.

(公立鳥取環境大学 教授)